

大きな影響があったと解してよからう。また張横渠は常総の下にいたって、性理の論と太極無極の伝を得たといわれ、楊龜山も仏法金湯編などによれば、常総について禪を学び、性善説を研討していることがわかる。これらの人々はいわゆる宋学形成に大きな役割を果したものであり、その点に於ては宋学における常総の影響は看過できぬものであらう。

また宋代の有名な文人である蘇東坡との交渉については、嘉泰普灯録二十三にも載せられているが、禪林僧宝伝二十四には東坡の詞を挙げ「堂堂総公、僧中之范」と述べており、常総から大いに啓発されたことが知られる。さらに常総と張商英については、安藤智信氏の「宋の張商英について」(東方学二十二)の中で言及されており、常総は当時の官界知識人の間で顕著な存在であったのである。しかもこのような思想家や文人と目される人たちがばかりでない。嘉泰普灯録二十二には簽判劉絳臣との関係について、「劉絳臣、少以逸才、登仕版、於仏未之信、年三十二、会東林照覺総禪師、与語啓迪之、乃敬服、因醉心祖道」といっているが、彼は当時著名人には入らないこのような点からその交際は相当に幅の広いものと考えられる。

さてそれでは常総の如き宋代の禪僧と、当時の官僚、士大夫層との交渉は一体どのように解すべきか。これを考える時、比較対照すべきことは、魏晉の貴族と仏僧との関係であり、両者は現象として甚だよく似た形体を持っているが、根底には大きな差異が存するのである。その詳細については別の機会に譲ることとして、一言にして宋代官僚層と仏教との交渉をのぶれば、科挙出身の彼等官僚が自己の教養の幅をひろげ、官界にお

ける自己の立場をより豊かに見せる為に仏教を利用したのであり、またそれが彼等の内的充足の欲求にも適合するものであった所に、禪学の大きいなる進展がある。

中国仏教と宿業の問題

道 端 良 秀

一

宿業ということは、宿世の業ということで、業とは行為とか生活という意味に取ってよいから、宿業とは宿世即ち先の世における行為ということになるが、普通に宿業とは、宿世の業因といわれ、現在の禍禍の生活は宿世即ち前世における善悪の行為が原因となっている、と説くのが仏教の三世因果応報の思想である。宿因とか宿縁或は宿善とかいうのも、同じことである。

このような仏教の宿業の思想は、どのようにして中国の人々に受容されたであろうか、現世主義であり、現実を中心とする中国の人々に果してこのような、過去とか未来とかいう、深遠な考え方が、手易く受け入れられたであろうか、中国仏教がこの問題をどのように取扱ったかということは、頗る興味のある問題である。

二

東晋の戴安は「釈疑論」の内でこのようなことをいっている

る。「世の中には身をつゝしんで正しい道を行っているにも関わらず、天の罰や、人世の刑という苦しみを受ける人がいる一方には、我儘勝手な行動をして、悪の限りを尽しながら、自分は榮達幸福な生活をし、子孫までも繁昌しているものがある。これは一体どうしたことであるうかといへば、人間は天地から定められた性を受け、五行から気を受けて育つもので、元來賢愚、善悪、寿の長短、榮達窮乏などは、定められている運命で、人の善悪の行業によつて、もたらされるものではない。善行が幸福を、悪行が禍を得るといふような教は、善をすゝめんがための方便であつて、何ら真実ではない」と。

この論ではあくまでも人生の問題は生れながらにして定まっている運命であつて、自分の努力ではどうすることも出来ない」と主張する。この論文は実は仏教の三世応報も、儒教の天人感應説も信ずることが出来ないとして、廬山の慧遠に解答を求めた、その文章なのである。慧遠はこれに対して、弟子周統への解答文を送つたが、これでも彼は仏教の三世應報思想を受け入れる事が出来ないで再度手紙を送つて、周統への解答文に反論を試みている。

それによると彼はあくまでも天命、運命を主張し、仏教の宿世の因が現在を規定するということを肯定しても、なをその宿業が運命であると理解し、その宿業を現世の行為によつては到底変化せしむることは出来ない、丁度インドにおける宿作外道と呼ばれる人々の説と同じような主張をしている。彼は後には慧遠からの丁寧な解答、即ち三世因果應報即ち、現報、生報、後報の三報についての説明に、一応納得して筆を止めたよ

うであるが、果して理解し得たかどうかは疑問である。彼のような第一級の知識人ですら、この仏教の宿業ということが中々理解出来ず、総てを天命運命と解しようとしたことは、一般の知識人や、又庶民の間における宿業の理解や、その受容態度を知ることが出来よう。有名な明代の袁了凡の「陰陽錄」においても、矢張この運命論に生きようとしたことを述べているが、しかし一方具体的な多くの三世應報の靈驗譚や、仏教のジャーナカは、庶民の間には何ら躊躇なく物語りとして受け入れられたであろうが、果して自分の問題となし得たかどうか。

元來儒教も、天命、運命を説くが、その運命は現実の善悪の行為によつて変化せしめ得ると説く。積善積徳によつて悪を變じて善になし得ることが出来、寿の短を長に転ずることも出来ると説く。殆んど仏教と同じようであるが、それはあくまでも原則として、現世を中心としている。その善悪の未來性を説くこともあるが、それは甚だ莫然としたものであり、しかも家族制度的な子孫への影響を主としたもので仏教の如き個人ではない宿業においても亦そうである。

しかも宿業ということを理解しても、これを天命運命と同じように理解して、宿作外道の立場を取るかと思ふと、又一方においては、宿業ということを現世の善悪の業因にたつて、死後色々の善の果を受けることを、宿業というように受け取っている。その最も例が「太平広記」巻一三四に出ている「宿業畜生」の例話である。こゝには隋の竹永通以下十六人の話が出されているが、竹永は寺の粟六十石を貸りて返却せために、死後その寺の牛となつて生れて、その償いをするをいうのであ

るが、以下の例話は殆んどが皆現世に悪行をしたその報の結果として、畜生に生れ、それを知って助ける話である。いづれも皆現世における悪業が死後畜生に生れるという、寧ろ目撃者の談話の例証としたものである。こゝでは宿業ということを現世の悪業の結果、死後畜生に生れるにいう畜生だけとっているが、いづれしても小説類集宿に宿業の名目をつけるまでになつて中心仏教の展開を知るべきである。

窺基作と伝えられる阿弥陀経疏 について

村 地 哲 明

本書はその奥書によれば、唐の大中七年(八五三)に福州開元寺の常契が、本邦の円珍に伝えたものという。しかし承和六年(八三九)に帰朝せる円行(七九九—八五二)の「靈巖寺目錄」にすでに記載されているから、まず円行によって伝えられたものであらう。そして新羅義天の「教藏総録」・藏俊の「注進法相宗章疏」・覚明房の「長西録」等では、窺基作として記録せられている。しかるに東大寺円超の「諸宗章疏」や、興福寺永超の「東域伝灯録」には、この疏の文義が窺基の他の著書と異なるため、慈恩の真撰として容認することに疑問を懐いて、真偽は未定とされているのである。近頃では、佐々木月樵師(支那浄土教史)二五七頁・二六一頁)は慈恩の「大乘義林

章」の仏身仏土義と本疏との所説を対照するに、二著の教義が一致することから真撰説を採用せられている。望月信亨博士は「浄土教之研究」においては、窺基の真撰説を肯定されているが、「支那浄土教理史」(一九九頁)では、四種浄土の分類等は、かの「大乘義林章」等の説と異つておらぬけれど、その釈風が他の窺基の書に類せず、また師支婁の新訳を註釈せず旧訳を用いていることは、彼の真撰ではなからうかと疑問を述べておられる。

かように真偽の論説が示されている本疏をその内容について研究するに、まず引用経論においては六十六経十七論であつて、すべてで八十三部という数多い経論が依用されている。しかしながら「唯識論」・「瑜伽論」・「顯揚論」・「対法論」等の、法相宗関係の重要な諸論が引用されていないのである。また引文中に「解深密経」の説として、三地の菩薩にして始めて浄土に往生する説が、この経文は漢訳の「解深密経」になく、「瑜伽論」第七十九に顕わされる義であつた。すなわち「瑜伽論」に説かれる義を「解深密経」の説であると誤つて叙説されているのは、窺基作に非ざることを逆証するものであらう。つぎに本疏では、真諦の学説が十二回に亘つて引用され、流支説は三回、波頗説が一回引用せられているが、支婁説は少しも見られないのである。このように支婁説が依用されずに、真諦の弘通せる撰論仏教の系統であることを示すものである。また本疏の註釈の特徴として、弥陀の浄土の莊嚴を積するについて、「撰論」の十八円浄中の九種円浄に配釈しているのである。かゝる解釈の仕方から考えると、これも窺基作とするより